

琵琶傳

泉鏡花作

一

新婦が、床杯をなさむとて、座敷より休息の室に
開きける時、介添の婦人は不圖其顔を見て驚きぬ。

面貌殆ど生色なく、今にも僵れむばかりなるが、
ものに激したる状なるにぞ、介添は心許なげに、つ
い居て着換を捧げながら、

「もし、御氣分でもお悪いのぢやございません
か。」と聲を密めてそと問ひぬ。

新婦は凄冷なる瞳を轉じて、介添を顧みつ。

「何。」とばかり簡單に言捨てたるまゝ、身さ
へ眼をさへ動かさで、一心唯思ふことある其一方を
見詰めつゝ、衣を換ふるも、帯を緊むるも、衣紋を
直すも、襷を揃ふるも、皆他の手に打任せつ。

尋常ならぬ新婦の氣色を危みたる介添の、何かは
知らずおど／＼しながら、

「此方へ。」

と謂ふに任せ、渠は少しも躊躇はで、静々と歩を廊下に運びて、やがて寢室に伴はれぬ。床には、ヤ良人ありて、新婦の来るを待ち居れり。渠は名を近藤重隆と謂ふ陸軍の尉官なり。

式は別に謂はざるべし、媒妁の妻退き、介添の婦人皆罷出つ。唯二人、閨の上に相對し、新婦は屹と身體を固めて、端然として坐したるまゝ、まおもてに良人の面を瞻りて、打解けたる状毫もなく、はた恥らへる風情も無かりき。

尉官は腕を拱きて、こもまた和ぎたる體あらず、殆ど五分時ばかりの間、互に眼と眼を見合せしが、遂に良人先づ肅びたる聲にて、

「お通。」 とばかり呼懸けつ。新婦の名はお通ならむ。

呼ばるゝに應へて、
「唯。」 とのみ。渠は判然ともものいへり。尉官は太く苛立つ胸を、強ひて落着けたらむ如き、沈める、力ある音調もて、

「汝、よく娶たな。」 お通は少しも口籠らで、
「何うも仕方がございません。」 尉官は少時黙

しけるが、稍其聲を高うせり。

「おい、謙三郎は何うした。」

「息災で居ります。」

「よく、汝、別れることが出来たな。」

「詮方がないからです。」

「何故詮方がない。うむ。」

お通はこれが答をせで、懷中に手を差入れて一通の書を取り出し、良人の前に繰廣げて、兩手を膝に正してき。尉官は右手を差伸し、身近に行燈を引寄せつゝ、眼を定めて読みおろしぬ。

文字は蓋し左の如きものにてありし。

お通に申残し参らせ候、御身と近藤重隆殿とは許嫁に有之候

然るに御身は殊の外彼の人を忌嫌ひ候様子、拙者の眼に相見え候へば、女ながらも其由のいひ聞け難くて、臨終の際まで黙し候

さ候へども、一旦親戚の儀を約束いたし候へば、義理堅かりし重隆殿の先人に對し面目なく、今さら變替相成らず候あはれ犠牲となりて拙者の名のため

に彼の人に身を任せ申さるべく、斯の遺言を認め候

時の拙者が心中の苦痛を以て、御身に謝罪いたし候

月 日

お通殿

清川通知

二度三度繰返して、尉官は容を更めたり。

「通、吾は良人だぞ。」

お通は聞きて両手を支へぬ。

「唯、貴下の妻でございます。」

爾時尉官は傲然として俯向けるお通を瞰下しつゝ、
「吾のいふことには、汝、屹と従ふであらうな。」

此方は頭を低れたるまゝ、

「否、お従はせなさらなければ不可ません。」

尉官は眉を動かしぬ。

「ふむ。しかし通、吾を良人とした以上は、汝、
妻たる節操は守らうな。」

お通は屹と面を上げつ、

「いゝえ、出来さへすれば破ります。」

尉官は怒氣心頭を衝きて烈火の如く、

「何だ！」と其言を再びせしめつ。お通は怯め

ず、臆する色なく、

「はい。私に、私に、節操を守らねはなりません
と謂ふ、そんな、義理はございませんから、出来さ
へすれば破ります！」 恐氣もなく言放てる、片類
に微笑を含みたり。 尉官は直ちに頷きぬ。胸中豫
めこの算ありけむ、熱の極は冷となりて、ものいひ
もいと静に、

「應、屹と節操を守らせるぞ。」

渠は唇頭に嘲笑したりき。

相本謙三郎は唯一人清川の書齋に在り。當所もな
 く室の一方を見詰めたるまゝ、默然として物思へり。
 渠が書齋の縁前には、一個數寄を盡したる鳥籠を懸
 けたる中に、一羽の純白なる鸚鵡あり、餌を啄むに
 も飽きたりけむ、もの淋しげに謙三郎の後姿を見遣
 りつゝ、頭を左右に傾け居れり。一室寂たること頃
 刻なりし、謙三郎は其清秀なる面に鸚鵡を見向きて、
 太く物案ずる状なりしが、憂ふる如く、危む如く、
 はた人に憚ることあるものゝ如く、「琵琶。」と一
 聲、鸚鵡を呼べり。琵琶とは蓋し鸚鵡の名ならむ。
 低く口笛を鳴すとひとしく、

「ツウチヤン、ツウチヤン。」
 と叫べる聲、奥深きこの書齋を徹して、一種の音
 調打響くに、謙三郎は愁然として、思はず涙を催し
 ぬ。

琵琶は年久しく清川の家に養はれつ。お通と渠
 が従兄なる謙三郎との間に處して、巧みに其情交を
 暖めたりき。他なし、お通が此家の愛女として、室

を隔てながら家を整したりし頃、未だ近藤に嫁がざりし以前には、謙三郎の用ありて、お通に見えむと欲することある毎に、今しも渠がなしたる如く、籠の中なる琵琶を呼びて、爾く口笛を鳴すと、もに、琵琶が玲瓏たる聲をもて、「ツウチャン、ツウチャン。」と傳令すべく、よく馴らされてありしかば、此時の如く聲を揚げて二たび三たび呼ぶと、もに、帳内深き處肅として物を縫ふ女、物差を棄て、針を措きて、直に謙三郎に來りつゝ、笑顔を合すが例なりしなり。

今やなし。あらぬを知りつゝ謙三郎は、日に幾回、夜に幾回、果敢なきこの兒戯を繰返すことを禁じ得ざりき。

さて其頃は、征清の出師ありし頃、折は恰も豫備後備に對する召集令の發表されし折なりし。

謙三郎もまた我國徴兵の令に因りて、豫備兵の籍にありしかば、一週日以前既に一度聯隊に入営せしが、其月其日の翌日は、旅團戦地に發するとて、親戚父兄の心を察し、一日の出營を許されたるにぞ、

渠は父母無き孤兒の、他に繫累とてはあらざれども、
兒として幼少より養育されて、母とも思ふ叔母に會
して、永き離別を惜まむため、朝來こゝに來り居り、
聞くこともはた謂ふことも、永き夏の日に盡きざる
に、歸營の時限迫りたれば、謙三郎は、ひし／＼と、
戎衣を装ひ、將に辭し去らむとして躊躇しつ。

書齋に品あり、衣兜に容るゝを忘れたりとて既に
玄関まで出でたる身の、一人書齋に引返しつ。

叔母と其奴婢の輩は、皆玄関に立併びて、いづれ
も面に愁色あり。彈丸の中に行く人の、今にも來る
と待ちけるが、五分を過ぎ、十分を経て、なほ書齋
より來らざるにぞ、謙三郎は如何にせしと、心に思
へる折から、寂として廣き家の、遙奥の方よりおと
づれきて、

「ツウチャン、ツウチャン。」
と鸚鵡の聲、聞き馴れたる叔母の此時のみ何思ひ
けむ色をかへて、急がはしく書齋に到れり。

謙三郎は琵琶に命じて、お通の名をば呼ばしめし

が、来るべき人のあらざるに、平時の事とはいひながら、あすは戦地に赴く身の、再び見、再び聞き得べき聲にあらねば、意を決したる首途にも、渠はそゞろに涙ぐみぬ。

時に縁側に跽音あり。女しき風情を見られまじと、謙三郎の立ちたる時、叔母は早くも此方に來りて、突然鳥籠の蓋を開けつ。

驚き見る間に羽ばたき高く、琵琶は籠中を逸し去れり。

「おや！ 何をなさいます。」
と謙三郎はせはしく問ひたり。叔母は此方を見も返らで、琵琶の行方を瞻りつゝ、縁側に立ちたるが、あはれ消残る樹間の雪か、緑翠暗きあたり白き鸚鵡の見え隠れに、蝸一聲鳴きける時、手を以て涙を拭ひつゝ徐に謙三郎を顧みたり。

「いゝえね、未練が出ちやあ悪いから、もうあの聲を聞くまいと思つて。……」

叔母は涙の聲を飲みぬ。

謙三郎は羞ぢたる色あり。これが答は為さずして、
胸の間の釦紐を懸けつ。

「左様なら参ります。」

とつか／＼と書齋を出でぬ。叔母は引添ふ如くにして、其左側に従ひつゝ、歩みながら口早に、

「可いかい、先刻謂つたことは違へやしまいね。」

「何ですか。お通さんに逢つて行けとおつしやつた、あのことですか。」

謙三郎は立留りぬ。

「あゝ、そのことゝも、お前、軍に行くといふ人に他に願があるものかね。」

「其は困りましたな。彼處までは五里あります。」

今朝だと腕車で駈けて行つたんですが、到底逢はせないといひますから行かうといふ氣もありません。三十分間、兵營までさへ大急でございます。飛んだ長座をいたしました。」

謂ふことを聞きも果てず、叔母は少しく急き込みて、

「其言は聞いたけれど、女の身にもなつて御覽、如彼田舎へ推込まれて、一年越外出も出來ず折があ

つたらお前に逢ひたい一心で、細々命を繋いで居るもの、顔も見せないで行かれちやあ、其こそ彼女は死んでしまふよ。お前も餘り察しがない。」

と戎衣を捉へて放たざるに、謙三郎は困じつゝ、
「左様おつしやるも無理ではございませんが、もう今から逢ひますには、脱營しなければなりません。」

「は、脱營でも何でもおし。通が私や可哀さうだから、よう、後生だから。」
と片手に戎衣の袖を捉へて、片手に拝むに身もよ

もあらず、謙三郎は蒼くなりて、
「何、私の身は何うならうと、名譽も何も構ひません

せんが、其では、其では何うも國民たる義務が缺けますから。」
と誠心寵めたる強き聲音も、いかでか叔母の耳に入るべき。只管頭を打掉りて、

「何が缺けようとも構はないよ。何が何でも可いんだから、これ唯た一目、後生だ。頼む。逢つて行つてやつておくれ。」

「でも其だけは。」 謙三郎のなほ辭するに、果は怒りて血相かへ、

「えゝ、何ういつても肯かないのか。私一人だから可いと思つて、伯父さんがおいでの時なら、そんなこと、いはれやしまいが。え、お前、何時も口癖のやうに何とおいひだ。屹と養育された恩を返しなすつて、立派な口をきく癖に。私がこれほど頼むものを、それぢやあ義理が済むまいが。餘りだ、餘りだ。」

謙三郎は如何とも辨疏なすべき言を知らず、少時沈思して頭を低れしが、叔母の背をば搔撫でつゝ、「可うございます。何とでもいたして屹と逢つて参りませう。」

謂はれて叔母は振仰向き、さも嬉しげに見えたるが、謙三郎の顔の色の尋常ならざるを危みて、「お前、可いのかい。何ともありやしないかね。」
「否、お憂慮には及びません。」といと淋しげに微笑みぬ。

「奥様、何處へござらつしやる。」

と不意に背後より呼留められ、人は知らずと忍び出で、今しも漸く戸口に到れる、お通はハツと吐胸をつきぬ。

されども渠は聞かざる眞似して、手早く鎖を外さむとなしける時、手燭片手に駈出で、無手と帯際を引捉へ、掴戻せる老人あり。

頭髮恰も銀の如く、額兀げて、髯まだらに、いと嚴めしき面構の一癖あるべく見えけるが、のぶとき聲にてお通を呵り、

「夜夜中あてことも無え駄目なこツた、斷念さつせい。三原傳内が眼張つてれば、ぴくともさせるこつちやあ無え。眼を眩まさうとつてそりや駄目だ。

何の戸外へ出すものか。此方へござれ。え、此方ござれと謂ふに。」

お通は屹と振り返り、

「お放し、私が一寸戸外へ出ようとするのを、何

のお前まへがお構かまひでない、お放はなしよ、えゝ！お放はなして
ば。
「

「なりましねえ。麻畑あさはたけの中なかへ行いつて逢あはうたつて、
さうは行ゆかねえ。素直すなほに此方こつちへござれツていに。」

お通つうは肩かたを動うごかしぬ。

「お前まへ、主人しゅじんを何どうするんだえ。些少ちつと出過でぎやし
ないかね。」

「主人しゅじんも絲瓜へちまもあるものか、吾おれは、何なんでも重隆しげたかさま様
のいひつけ通どほりに屹きつと勤つとめりや其それで可いいのだ。お前めえ
様さまが何なんと謂いつたつて耳みみにも入いれるものぢやねえ。」

「邪険じやけんも大抵たいていにするものだよ。お前まへあんまりぢや
ないかね。」

とお通つうは黒くろく艶つやかな瞳ひとみを以もつて老夫らうふの顔かほをじろりと
見みたり。傳内でんないはビクともせず、

「邪険じやけんでも因業いんごふでも、吾おれ、何なんにも構かまはねえだ。旦だん
那様なさまのおつしやる通とほり屹きつと勤つとめりや其それで可いいのだ。」

威あを以もて制せいすることならずと見みたる、お通つうは少すこし
く氣色けしきを和やはらげ、

「しかしねえ、お前まへ、其處そこには人情にんじやうといふものが
あるわね。まあ、考かんがへて見みておくれ。一昨をと日の晚ばんは
じめて門もんをお敲たきなすつてから、今夜こんやで丁ちやうど三晚みばんの

間、むかうの麻畑の中に隠れておいでなすつて、め
しあがるものといつちや、一粒の御飯もなし、内に
居てさへひどいものを、ま、蚊や蚋で何んなだらう
ねえ。脱營をなすつたツて。もう、お前も知つてる
通り、今朝ツから何の位、おしらべが来たか知れな
いもの、おつかまりなさりや其ツ切ぢやあ無いか。
何の、一寸ぐらゐ顔を見せたからつて、見たからつ
て、お前、この夜中だもの、ね、お前この夜中だも
の、旦那に知れツこはありやしなひよ。でもそれで
も料簡がならなけりやお前でも可い、お前でも可い
からね、實はあの隠れ忍んで、やう／＼拵へたこの
召食事をそつと届けて来ておくれ、よ、後生だよ。
私に一目逢はうとつて其位に辛抱遊ばす、それを私
の身になつちやあ、ま、どんなだらうとお思ひだ。
え、後生だからさ、もう、私や居ても、起つても、
居られやしなひよ。後生だからさ、一寸届けて来て
おくれなね。」

傳内は唯頭を掉るのみ。

「何を謂はツしても駄目なこんだ。そりや、は、
逆も駄目でござる。こんなことがあらうと思はつし

やればこそ、旦那様が扶持ふちい着つけて、お前めえさま様の番ばんを
さして置おかつしやるだ。」

お通つうはいとも切せつなき聲こゑにて、

「さ、さ、其そのことは聞きえたけれど あゝ、何なん
といつて頼たのみやうもない。一層いちそうお前まへ、わ、私わたしの眼めを
潰つぶしておくれ、さうしたら顔かほを見みる憂きつ慮かひもあるまい
から。」

「そりや不可いけえだ。何なんでも、は、お前めえさま様に氣きを着つ
けて、蚤のみにもさゝせるなといふ、おつしやりつくだ
アもの。眼めを潰つぶすなんてあてこともない。飛とんだこ
とをいはつしやる。其それにしてもお前めえさま眼めが見みえねえ
でも、口くちが利きくだ。何なんでも、はあ、一切いっさい、男をとこと逢あは
せることゝ、話はなし談だんをさせることがならねえといふ、
旦那だんなさま様さまのおつしやりつくだ。斷あきら念まめてしまはつしや
い。何なにといつても駄だ目めでござる。」

お通つうは胸むねも張はり裂さくばかり、「えゝ。」と叫さけびて、
身みを震ふるはし、肩かたをゆりて、

「イ、一層いっそう、殺ころしておしまひよう。」

傳内は自若として、

「これ、またあんな無理を謂ふだ。蚤にも喰はすことのならねえものを、何として、は、殺せるんだ。さ駄々を捏ねゝえで此方へござれ。ひどい蚊だかなう。お前様アくはねえか。」

「えゝ、蚊がくふ處のことぢやないわね。お前も餘り因業だ、因業だ、因業だ。」

「なに其、いはつしやるほど因業でもねえ。此家をめざしてからに、何遍も探偵が遣つて來るだ。」

はい、麻畑と謂つてやりや、即座に捕まへられて、吾も、はあ、夜の目も合はさねえで、お前様を見張るにも及ばずかい、御褒美も貰へるだ。けんどもが、何も旦那様あ、訴人をしろと謂ふ、いひつけはしなさらねえだから、吾知らねえで、押通しやさ。その代にやあまた、いひつけられたことはハイ一寸もずらさねえだ。何でも戸外へ出すことはありません。づくでも逢はせねえから、さう思つてくれさつしやい。

お通はわつと泣出しぬ。

傳内は眉を顰めて、

「あれ、泣かあ。何時もねえことに何うしたゞ。
お前様婚禮の晩床入もしねえで其場ツから此方へ追
出されて、今ぢや月日も一年越、男猫も抱かないで
内にばかり。敷居も跨がすなといふいひついで、吾
に眼張とれといふこんだから、吾や、お前様の、心
が思ひやらるゝで、見て居るが辛いでの、何様に断
らうと思つたか知ンねえけど、今の旦那様三代め
で、代養なはれた老夫だで、横のものをば縦様にし
ると謂はれた處で従はなけりやなんねえので、畏つ
たことは畏つたが、さてお前様が嘸泣續けるこんだ
らうと、生命が縮まるやうに思つたゞ。すると案じ
るより産が安いで、長い間かうやつて一所に居るが、
お前様の斷念の可いには魂消たね。思ひなしか、氣
のせゐか、段竄れるやうには見えるけど、つひぞ
膝も崩した事なし、整然として威勢がよくつて、吾
はあ、ひとりでに天窓が下るだ、はてこゝいらは、
田舎も田舎だ。何處に居た處で何の樂もねえ老夫で
せえ、つまらねえこつたと思つて、氣が滅入るに、
お前様は、えらい女だ。面壁イ九年とやら、悟つた
ものだと我あ折つて居たんだがさ、藥袋もないこと
が湧いて來て、お前様つひぞ見たこともねえ泣かつ

しやるね。御心中のウ察しねえでもねえけんどが、
旦那様にやあ、代へられましねえ。はて、お前様の
様でもねえ。断念めてしまはつしやい。何の道斯う
謂ひ出したからにやいくら泣いたつてそりや駄目
さ。
」

然り親仁のいひたる如く、お通は今に一年間、幽
閉されたるこの孤屋に處して、涙に、口に、はた容
儀、心中の其痛苦を語りしこと絶えてあらず。修容
正肅殆んど端倪すべからざるものありしなり。され
ど一たび大磐石の根の覆るや、小石の轉びぶが如き
ものにあらず。三晝夜麻畑の中に蟄伏して、一たび
其身に會せむため、一粒の飯をだに口にせで、却り
て濕蟲の餌となれる、意中の人の窮苦には、泰山と
雖も動かで止むべき、お通は轉倒したるなり。

「そんなに解つて居るのなら、一寸の間、大眼に
見ておくれ。」

と前後も忘れて身をあせるを、傳内柳も手を弛め
ず、

「はて、肯分のねえ、何ういふものだね。」

お通は涙にむせいりながら、

「え、肯分がなくなつても可いよ、お放し、放しなつてば、放しなよう。」

「是非とも肯かなけりや、うぬ、ふん縛つて、動かさねえぞ。」

と傳内は一呵せり。

宜しこそ、近藤は、執着の極、婦人をして我に節操を盡さしめむか、終生空閨を護らしめ、おのれ一分時も其傍にあらずして、なほよく節操を保たしむるにあらざるよりは、我に貞なりとはいふことを得ずとなし、はじめよりお通の我を嫌ふこと、蛇蝎もたゞならざるを知りながら、恰も渠に魅入たらむ如く、進退隙なく附絡ひて、遂にお通と謙三郎とが既に成立せる戀を破りて、おのれ犠牲を得たりしにもかゝはらず、従兄妹同士が戀愛のいかに強きかを知れるより、嫉妬の餘、奸淫の念を節し、當初婚姻の夜よりして、衾をとみにせざるのみならず、一度も來りて其妻を見しことあらざる、孤屋に幽閉の番人として、この老夫をば擇びたれ。お通は止むなく死力を出して、瞬時傳内とすまひしが、風にも堪へざ

るかよわき婦人の、憂にやせたる身を以て、いかで
健腕に敵し得べき。

手もなく奥に引立てられて、其まゝ其處に押据ゑ
られつ。

たとひいかなる手段にても到底この老夫をして我
に忠ならしむることの能はざるをお通は断じつ。激
昂の反動は太く渠をして落膽せしめて、お通は張も
なく崩折れつゝ、といきをつきて、悲しげに、

「老夫や、世話を焼かすねえ 堪忍しておくれ
よう 老夫や。」

と身を持餘せるかの如く、肱を枕に寝僵れたる、
身體は綿とぞ思はれける。

傳内はこの一言を聞くと齊しく、窶める兩眼に涙
を浮べ、一座退りて手をこまぬき、拳を握りてもの
いはず。鐘聲遠く夜は更けたり。萬籟天地聲なき時、
門の戸を幽に叩きて、

「通ちゃん、通ちゃん。」
と二聲呼ぶ。

お通は其聲を聞くや否や、弾械の如く飛起きて、

屹と片膝を立てたりしが、傳内の眼に遮られて、答ふることを得為ざりき。

戸外にては言途絶え、内を窺ふ氣勢なりしが、

「通ちゃん、これだけにしても、逢はせないから、所詮あかないとあきらめるが」

「呼吸も絶げに途絶え、隙間を洩れて聞ゆるにぞ、お通は居坐直整へて、疊に両手を支へつ、行儀正しく聞き居たる、背打ふるへ、髪ゆらぎぬ。」

「實はね、叔母さんが、謂ふから、仕方がないやうに、いつて居たけれど、逢ひたくつて、實はね、私が。」

「といひかゝれる時、犬二三頭高く吠えて、謙三郎を圍めるならむか、叱ツ叱ツと追ふが聞えつ。」

更に低まりたる音調の、風なき夜半に弱しく、
「實はね、叔母さんに無理を謂つて、逢はねばならないやうにして貰ひたかつた。だからね、私にどんなことがあらうとも叔母さんが氣にかけないやうに。」

と謂ふ折しも凄まじく大戸にぶつかる音あり。

「あ、痛。」

と謙三郎の叫びたるは、足や咬まれし、手やか
られし、犬の毒牙にかゝれるならずや。あとは途ぎ
れてことばなきに、お通はあるにもあらぬ思ひ、
思はず起つて駈出でしが、肩肱いかめしく構へたる、
傳内を一目見て、蒼くなりて立竦みぬ。

これを見、彼を聞きたりし、傳内は何とかしけむ、
つと身を起して土間に下立ち、ハヤ懸金に手を懸け
つ。

「えゝ、た、た、たまらねえ／＼、一か八かだ、
逢はせてやれ。」

とがたりと大戸引開けたる、トタンに犬あり、颯
と退きつ。

懸寄るお通を傳内は身を以て謙三郎にへだてつゝ、
謙三郎のよろめきながら内に入らむとあせるを遮り、
「うむや、さう易々とは入れねえだ。旦那様のい
ひついで三原傳内が番する間は、敷居も跨がすこつ
ちやあねえ。断て入るなら吾を殺せ。さあ、すつぱ
りとゑぐらつしやい。えゝ、何を愚圖々々、もうお

前様方の様に思ひ詰りや、これ、人一人殺されねえ
ことあ無え筈だ。吾、はあ、自分で腹あ突いちやあ、
旦那様に濟まねえだ。濟まねえだから、死なねえだ、
死なねえうちは邪魔アするだ。この邪魔物を殺さつ
しやい、七十になる老夫だ。殺し惜くもねえでない
か。さあ、やらつしやい。えゝ！ 埒のあかぬ。」
と両手に襟を押開けて、仰様に咽喉佛を示したる
を、謙三郎はまたゝきもせで、良しばらく瞞めたる
が、銃剣一閃し、暗を切つて、

「許せ！」

といふ聲もるとも、咽喉に白刀を刺されしまゝ、
傳内は八々と僵れぬ。

同時に内に入らむとせし、謙三郎は敷居につまづ
き、土間に両手をつきざまに俯伏になりて起きも上
らず。お通は恰も狂氣の如く、謙三郎に取縋りて、
「謙さん、謙さん、私や、私や、顔が見たかつ
た。」

と肩に手を懸け膝に抱ける、折から靴音、劍摩の
響。五六名どや／＼と入來りて、正體もなき謙三郎
をお通の手より奪ひ取りて、有無を謂はせず引立つ
るに、
■■■■とばかり跳起きたるまゝ、茫然として立

ちたるお通つうの、齒はをくひしばり、瞳ひとみを据すゑて、よろ
／＼と僵たふれ懸かれる、肩かたを支さへて、腕うでを掴つかみて、
「汝うぬ、何どうするか、見みろ、太ふとい奴やつだ。」
これ婚姻こんいんの當夜たうや以來いらい、お通つうがいまだ一度ひとたびも聞きかざ
りし鬱うつし怒いかれる良人をとこの聲こゑなり。

四

出征に際して脱營せしと、人を殺せし罪とをもて、
勿論謙三郎は銃殺されたり。

謙三郎の死したる後も、清川の家^{いへ}に於ける居馴れ
し八疊の渠^{かれ}が書齋^{しよさい}は、依然として舊態^{きうたい}を更めざりき。

秋の末にもなりたれば、籐筵^{とうむしろ}に代ふるに秋野の錦^{にしき}
を浮織^{うきおり}にせる、花毛氈^{はなもうせん}を以てして、いと華々しく敷^{しき}
詰めたり。

床なる花瓶の花も萎まず、西向の二子の下なりし
机の上も片づきて、硯の蓋に塵もおかず、座蒲團を
前に敷き、傍なる桐火桶に烏金の火箸を添へて、唯
見ればなかに炭火も活けつ。

紫たんの角の茶盆の上には幾個の茶碗を俯伏せて、
菓子^{くわし}を装^もりたる皿^{さら}をも置^おけり。

机の上には一葉の、謙三郎の寫眞を祭り、あたり
の襖を閉切りたれば、さらでも秋の暮なるに、一室
森とほのあかるく四隅はやう／＼暗くなりて、ものゝ
音さへ聞えざるに、火鉢に懸けたる鐵瓶の湯氣のみ

薄く立のぼりて、湯の沸る音静なり。折から彼方より襖を明けつ。一脈の風の襲入りて、立昇る湯氣の摩くと同時に、陰々たる此書齋をば眞白き顔の覗きしが、

「謙さん。」

と呼び懸けつ。裳すら／＼入りざま、ぴたと襖を立籠めて、室の中央に進み寄り、愁然として四邊をニし、坐りもやらず、頤を襟に埋みて悄然たる、お通の 倅竄れたり。

やがて桐火桶の前に坐して、亡き人の蒲團を避けつゝ、其傍に崩折れぬ。

「謙さん。」

とまた低聲に呼びて、もの驚きを為たらむ如く、肩をすばめて首低れつ。鐵瓶にそと手を觸れて、

「おゝ、よく沸いてるね。」

と茶盆に眼を着け、其蓋を取のけ、冷かなる吸子の中を差覗き、打悄れたる風情にて、

「貴下、お茶でも入れませうか。」

と寫眞を、ぢつと瞻りしが、はら／＼と涙を溢して、其後はまたものいはず、深き思に沈みけむ、身

動きだにもなさゞりき。

落葉おちばさらりと障子しやうじを撫なでゝ、夜よるは漸やうやく迫せまりつゝ、あるかなきかのお通つうの姿すがたも黄昏たそがれの色いろに蔽おほはれつ。炭すみ火びのじようの動うごく時とき、いかにしてか聞きえつらむ。

「ツウチヤン。」

とお通つうを呼よべり。

再びふたゝ、

「ツウチヤン。」

とお通つうを呼よべり。お通つうは黙想もくさうの夢ゆめより覺さめて、聲こゑする方かたを屹きつと仰あふきぬ。

「ツウチヤン。」

とまた繰返くりかへせり。お通つうはうか／＼と立起たたらありて、一いつ歩ほを進すすめ、二歩にほを行ゆき、縁側えんがはに出いで、庭にはに下おり、開あけ忘わすれたりし裏うちの非常口ひじょうぐちよりふら／＼と立出たちいでゝ、何處どこともなく歩あゆみ去さりぬ。

恚かて幾分いくぶんじ時の其間そのあひだ、足あしのまゝに三三さまよへりし、お通つうは不圖ふとこころづ心着こころづきて、

「おや、何處どこへ來きたらうね。」

と其身そのみみづからを怪あやしみたる、お通つうは見るより色いろを變かへぬ。

こゝぞ陸軍の所轄に屬する埋葬地の邊なりける。
銃殺されし謙三郎もまた葬られて此處にあり。

彼夜、お通は機會を得て、一度謙三郎と相抱き、
互に顔をも見ざりしに、意中の人は捕縛されつ。

其時既に精神的絶え果つべかりし玉の緒を、醫療
の手にて取留められ、活くるともなく、死すにもあ
らで、良二ヶ月を過ぎつる後、一日重隆のお通を強
ひて、ともに近郊に散策しつ。

小高き丘に上りしほどに、不圖足下に平地ありて
廣表一圓十町餘、其一端には新しき十字架ありて建
てるを見たり。

お通は見る眼も淺ましきに、良人は豫め用意や為
けむ、從卒に持つて來させし、床几を其處に押並べ
て、敢てお通を抑留して、見る目を避くるを許さざ
りき。

武歩忽ち丘下に起りて、一中隊の兵員あり。樺色
の囚徒の服着たる一個の縄附を挟みて眼界近くなり
けるにぞ、お通は心から見るともなしに、ふと其囚
徒を見るや否や、座右の良人を流眄に懸けつ。曾て
「何うするか見ろ」と良人がいひし、それは、す

なはちこれなりしよ。お通は十字架を一目見てしだに、なほ且つ震ひをのける先の状には引變へて、見る／＼囚徒が面縛され、射手の第一第二弾、第三射撃の響とゝもに、囚徒が固く食ひしぼれる唇を洩る鮮血の、細く、長く其胸間に垂れたるまで、お通は瞬もせず瞻りながら、手も動かさず態も崩さず、石に化したるものゝ如く、一筋二筋類にかゝれる、後毛だにも動かさざりし。

銃殺全く執行されて、硝烟の香の失せたるまで、尉官は始終お通の舉動に細かく注目したりけるが、心地好げに髯を捻りて、

「勝手に節操を破つて見る。」

と片頬に微笑を含みてき。お通は其時蒼くなりて、
「もう、破らうにも破られません。しかし死、死

ぬことは何時でも。」

尉官はこれを聞きもあへず、

「馬鹿。」

と激しくいひすくめつ。お通の首の低るゝを見て、
「従卒、家まで送つてやれ。」

命ぜられたる従卒は、お通がみづから促したるま

で、恐れて起つことをだに得せざりしなり。

恚て其日の悲劇は終りつ。

お通は家に歸りてより言行殆ど平時の如く、或は泣き、或は怨じて、尉官近藤の夫人たる、風采と態度とを失ふことをなさざりき。

然りし後、未だ嘗て許されざりし里歸を許されて、お通は實家に歸りしが、母の膝下に来るともに、張詰めし氣の弛みけむ、渠はあどけなきものとなりて、泣くも笑ふも嬰兒の如く、ものぐるはしき體なるより、一日のばしにいひのばしつ。母は女を重隆の許に返さずして、一月餘を過してき。

されば世に亡き謙三郎の、今も書齋に在すが如く、且つ掃き、且つ拭ひ、机を並べ、花を活け、茶を煎じ、菓子を挟むも、みなこれお通が堪へやらず忍びがたなき追慕の念の、其一端をもらせるなる。母は女の心を察して、其舉動の殆ど狂者の如きにもかゝらず、制し、且つ禁ずることを得ざりしなり。

お通は琵琶ぞと思ひしなる、名を呼ぶ聲にさまよひ出で、思はず謙三郎の墳墓なる埋葬地の間に來り、心着けば土饅頭の未だ新らしく見ゆるにぞ、激しく往時を追懷して、無念、愛惜、絶望、悲惨、其ひとつだもなほよく人を殺すに足る、種々の感情に胸をうたれつ。就中重隆が執念き復讐の企にて、意中の人の銃殺さるゝを、目前我身に見せしめ、當時の無念禁ずる能はず。婦人の意地と、張とのために、勉めて忍びし鬱憤の、幾十倍の勢を以て今満身の血を炙るにぞ、面は蒼ざめ紅の唇白齒にくひしはりて、殆ど其身を忘るゝ折から、見遣る彼方の薄原より丈高き人物顯れたり。

闊歩埋葬地の間をよぎりて、不圖立停ると見えけるが、つか／＼と歩をうつして、謙三郎の墓に達り、足をあげて八々と蹴り、カツパと唾をはきかけたる、傍若無人の振舞の手に取る如く見ゆるにぞ、意氣激昂して煙りも立たむず、お通はいかで堪ふべき。

駈寄る婦人の聲音に、彼の人物は振り返りぬ。これぞ近藤重隆なりける。渠は旅團の留守なりし、いま山狩の歸途なり。ハタと面を合せる時、相隔ること三十歩、お通が其時の形相はいかに凄まじきものなりしぞ、尉官は思はず絶叫して、

「殺す！ 吾を、殺す！！！」

といふよりはやく、弾装したる獵銃を、戦きながら差向けつ。

矢も銃弾も中らばこそ、轟然一射、銃聲の、雲を破りて響くと同時に、尉官は苦と叫ぶと見えし、お通が鬚を兩手に掴みて、兩々動かざるもの十分時、ひとしく地上に重り伏せしが、一束の黒髪は其まゝ遂に起たざりし、尉官が兩の手に残りて、ひよろ／＼と立上れる、お通の口は喰破れる良人の咽喉の血に染めり。渠は其血を拭はむともせで、一足、二足、三足ばかり、謙三郎の墓に居寄りつゝ、裏がれたる聲いと細く、

「謙さん。」

といへるがまゝ、がツくり横に僵れたり。月青く、山黒く、白きものあり、空を飛びて、傍の枝に羽音

を留めつ。葉を吹く風の音につれて、

「ツウチヤン、ツウチヤン、ツウチヤン。」と二

たび三たび、笏を返して、琵琶は連に名を呼べり。

琵琶は連に名を呼べり。

【完】